

修士論文(要旨)

2018年 7月

日本国内日本語学校での ICT 活用授業
－ 「使える日本語」の養成を目指すデジタルデバイス利用のチュートリアル－

指導 宮副ウォン 裕子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

215J3003

金 完基

Master's Thesis (Abstract)
July 2018

Courses Making Use of ICT in Japanese Language Schools in Japan: A Tutorial on Use
of Digital Devices Aimed at Fostering "Japanese You Can Use"

Woanki Kim

215J3003

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Yuko Miyazoe-Wong

目次

第1章	はじめに.....	1
1.1	研究背景.....	2
1.2	研究目的.....	2
第2章	先行研究.....	3
2.1	日本語学校の現在.....	3
2.2	言語学習ストラテジー.....	5
2.3	ICTを用いた授業.....	8
第3章	パイロットスタディー:LINEを用いた授業外協働学習の試み.....	10
3.1	活動概要.....	10
3.2	活動内容と活動に現れた問題.....	12
3.3	フォローアップインタビューによって明らかになった問題.....	14
第4章	JANDIを用いた教室内スマートフォンチュートリアルの実践.....	19
4.1	活動概要.....	19
4.2	活動結果と分析.....	23
4.3	活動のまとめと改善点.....	26
第5章	実践調査:フォローアップインタビュー.....	28
5.1	調査概要.....	28
5.2	インタビュー内容.....	28
5.3	分析と結論.....	31
第6章	総合的考察.....	33
第7章	まとめと今後の課題.....	35

参考文献

巻末資料

本研究は本国内日本語学校でのデジタルデバイスを利用した授業内活動の研究である。

稿者が所属している日本語学校を含め多くの日本語学校では「原則授業中携帯電話使用禁止」となっているのが現状である。しかし、以前学生たちは電子辞書を持参して登校するのが当然だったが、現在はデジタルデバイスの普及に伴い、多くの学習者は電子辞書ではなくデジタルデバイスに頼るのも事実である。そこで稿者は「授業中携帯電話使用禁止ではなく、有効に活用できる方法はないのだろうか」という自分への問いから本研究を始めた。

本稿では、あらゆるデジタルデバイスのうち、学習者のほぼ全員が学校に持参するスマートフォンを利用し、日本語入力と漢字変換のチュートリアルを行った。漢字が苦手な学習者でも気軽に日本語を使うことで自信を持ち、「使える日本語」を身につけることを目標に授業計画を立て実施した。

本研究では実践活動を通して学習者が意識・無意識に使用した言語学習ストラテジーを調査し、そのデータを分析・考察する。本研究は、日本国内の首都圏にある日本語学校でのデジタルデバイスを利用した授業活動の分析と考察である。稿者は2014年6月から日本語教師として教壇に立っているが、現在に到るまで稿者を含む教師らを悩ませているのが学習者の「授業中のスマートフォン使用」である。稿者が所属している日本語学校を含め多くの日本語学校では「原則授業中携帯電話使用禁止」という規則になっている。しかし、以前学生は電子辞書を持参して学校へ来るのが当然だったが、2018年6月現在デジタルデバイスの普及に伴い、多くの学習者は電子辞書ではなくデジタルデバイスを使い、未習語彙を検索するようになったことも事実である。ここで稿者は「授業中携帯使用禁止ではなく、携帯電話を学習に有効に活用できる方法はないのだろうか」という自問自答し、それが本研究のきっかけとなった。稿者が本研究で明らかにしたい研究課題は次の3つである。

RQ1. 授業中の学習活動として、どのようにデジタルデバイスを有効に活用できるだろうか。

RQ2. 学習者がデジタルデバイスの便利さだけに頼らず、既習の日本語を実際に「使える日本語」にするにはどのような活動が望ましいのだろうか。

RQ3. 「使える日本語」の活動を通して、学習者はどんな種類の言語学習ストラテジーをどのように使用し、学習に役立てているだろうか。

まず、授業中の教室の環境を考える必要がある。衣川(2009)は教室の概念を新たに考える必要があるのではないかと述べている。現在までは「教室」という場に対する「教室らしさ」という「暗黙のルール」があったが、学習者の増加、多様化に伴って破綻していると指摘している。実際、稿者が勤務する日本語学校でも起きている現象で、学習者の増加に比して教師の人数は常に不足しており、教師一人が約20名の学生を担当している。大人数であるため教師一人が学生の個別的なニーズに応える指導をすることは容易ではない。加えて学習者の多様化により教師の指示に従わない学習者も増えているのも現状だ。

従来の日本語学校での学習者評価はテストの成績や発話時の日本語の正確さ、授業内活動の積極さなど学びの結果中心の評価であった。しかし、上述のように、授業中教師の指示を拒否する学習者もいる。中には「わかっているから」「面白くないから」との言い訳をつけ授業内活動を拒否する学生がいるという声もしばしば耳にする。これらは恐らくJSL環境の日本語学校であるため

あろう。実生活で日本語に触れることが多く、多少の誤りがあっても日本語話者とのコミュニケーションを取ることに困らないため、正確さを求めない学習者もいる。また、多くの学習者は国で 12 年間の教育を受けてから日本へ来ることが多い。久保田(2002)は、その伝統的な教育評価について知識を「もの」として捉えていることに過ぎないと指摘し、「知識伝達型」だという。つまり、彼らにとって実生活で必要とされる日本語には興味を持ってはいるが、詰め込み式の「知識伝達型」の日本語授業を好まない学習者も多い。従って、久保田(前掲書)は大人には参加・自己決定型学習ができる環境をデザインする必要があると述べている。本稿では漢字という表意文字に慣れていない非漢字圏学習者にまず慣れてもらうことを念頭に、従来の「知識伝達型」でなく、その知識をどう生かすかとともに **CEFR** と **Can-do-statements** の概念の下で、学習者が振り返って「できる」と思うような目標設定の提供と「使える」へ繋がる実践を行う。

学習者が無意識的に言語学習ストラテジーを使用するような、教師から学習者への手助け¹ができる授業計画である。ICT を用いることにより、学習者にいつもの教室内活動とは異なる事を提供する事で、学習者を刺激し、直接ストラテジーでは記憶ストラテジー、認知ストラテジー、補償ストラテジーを、間接ストラテジーではメタ認知ストラテジー、社会的ストラテジーを促進する活動を設計した。

一週間に1~2コマ²を学校から許可を得て、卒業予定の中級レベルのクラス16名を対象に実践を行った。スマートフォン³のローマ字・かな入力、変換の仕方、正しい漢字の選び方をはじめ、webサイトの紹介、ひらがなを漢字に変換、漢字をひらがなに変換などの活動を8週間にわたり、計7回を正式な授業として行った。その中で、参加者の9割が興味を持って積極的に参加し、教師の立場から見ても有意義な授業ができた。可視的な学びの結果としては参加者の参加が促進され、参加者の約7割が日本語入力を迅速かつ正確に行えるようになり、誤字・脱字が減少した。

さらに、7回にわたって行った活動を稿者の目的と言語学習ストラテジーを基に分析を行った。活動後、行ったフォローアップインタビューでは、インタビューに今回の活動の趣旨を説明し、声を聞いたところ、直接ストラテジーに加えて、間接ストラテジーも積極的に使用したことが明らかになった。また、今後取り組みたい学習活動についても様々な意見を聞くことができた。

本研究において主に見てきたのは ICT を利用して学習者に自信を持たせ、日本語が「使える」ことに気づかせることであった。実は、稿者は教師として、漢字が書けない非漢字圏の学習者が漢字で挫折する事例を多く見てきたため、彼らがデジタルデバイスを利用して小さな成功の経験を積み重ねることにより、苦手意識に打ち勝ち道具を駆使することで「日本語使用者」の仲間入りをし(日本語言語共同体への参加)、今後も「日本語使用者」として学び続け・使い続けたいという肯定的な意欲を持つに至ったというのが本研究の結論である。

本研究で扱えなかったが、稿者が接している学習者は9割が成人であるにも関わらず、学習において上述したように「漢字は難しいから」「わかっているから」「面白くないから」と言う学習者もいるため、成人教育とそのモチベーションまた、成人を対象にする、ICT を利用した大人の学びを中心とした中・長期的に授業計画を立て、学習者のニーズに応じてインプットした日本語をデジタル

1 スキャフォールディング (Scaffolding)

2 1 コマ 45 分

3 今回の実践で利用したデジタルデバイスはスマートフォンである。

デバイスを使い、アウトプットを促す学習者同士の協働活動を今後の課題にしたい。

参考文献

- 石黒広昭・菊池久一・Dommenic F. Berducci・King Beach・西口光一・土屋由美・松本健義・中原淳 (2001)『社会文化的アプローチの実際—学習活動の理解と変革のエスノグラフィー』北大路書房
- 久保田賢一・水越敏行 (2002)『デジタル時代の学びと創出—多様化する教育実践と学習環境デザイン』日本文教出版
- 小林ミナ・衣川隆生・池上麻希子・島田徳子・古川嘉子・森本郁代・柳町智治・山内博之 (2009)「—過去から現在へ—教室と能力観・学習観・教育観」『日本語教育の過去・現在・未来 第3巻』水谷修監修 凡人社
- 斎藤里美・田中望 (1999)「「学習ストラテジー」は学習者を幸福にするか」宮崎里司・ネウストプニー共編『日本語教育と日本語学習』くろしお出版
- 高橋敦 (2014)「グローバルネットワーク時代における「新しい日本語学習者」とオンラインコミュニティへの需要」『桜美林言語教育論叢』
10、pp.139-156. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009831570>
- 田中望・斎藤里美、(1993)『日本語教育の理論と実際』大修館書店
- 島田めぐみ・三枝令子・野口裕之 (2006)「日本語 Can-do-statements を利用した言語行動記述の試み—日本語能力試験受験者を対象として—」『世界の日本語教育』16、国際交流基金 pp.75-88
- 須田風志 (2007)「「国際化」の中の「逸脱した日本語」について」『リテラシーズ3』リテラシーズ研究会 編、くろしお出版 pp.47-61
- 速水敏彦 (2012)『感情的動機付け理論の展開『—やる気の素顔—』ナカニシヤ出版 pp.69-72
- パトリシア・クラントン(1999)『おとなの学びを拓く—自己決定と意識変容をめざして』
- 細川英雄 (2007)「新しい言語教育をめざして」『日本語教育のフロンティア—学習者主体と協働—』小川貴士 編著、くろしお出版、pp.1-20
- 細川英雄 (2012)『「ことばの市民」になる—言語文化教育の思想と実践』ココ出版
- 宮副ウオン裕子 (2014)「ヴァーチャル映画討論会における言語の社会化」『言語教育研究』5、pp.62-72.
- 山下隆史 (2005)「学習を見直す」『文化と歴史の中の学習と学習者—日本語教育における社会的パースペクティブ』西口光一 編、凡人社、pp.6-28
- 山下隆史 (2005)「理解する」『文化と歴史の中の学習と学習者—日本語教育における社会的パースペクティブ』西口光一 編、凡人社、pp.123-142
- 吉村弓子・宮副ウオン裕子 (2009)「日本と香港をつなぐヴァーチャル教室の映画批評交換—異文化理解における映画の効果と外国人留学生の役割—」『北海道言語文化研究』7、pp.29-40
- レベッカ L・オックスフォード(1994)『言語学習ストラテジー』宍戸通庸・伴紀子訳、凡人社
- Gardener, R. C. & W. E. Lambert (1959) Motivational variables in second language Acquisition, Canadian Journal of Psychology, 13: pp.266-72

参考ウェブサイト

久我瞳・立部文崇(2016)「日本語教育機関への ICT 導入に関する考察」『徳山大学論叢第 83 巻』徳山大学経済学会、pp.19-34

URL <http://ypir.lib.yamaguchi-u.ac.jp/tu/metadata/981> (2017 年2月9日閲覧)

斎藤里美 (2005)「学習者の「自律性」と「学習ストラテジー」に着目した日本語教育 ——東洋大学「言語と言語技術」のコースデザインを中心に——」『東洋大学人間科学総合研究所紀要第3号』 URL <http://www.toyo.ac.jp/site/ihs/ihs-bulletin03.html>(2018 年 5 月 18 日閲覧)

陳那森・山下泰生・窪田八洲洋(2016)「授業外学修におけるスマートフォンデバイスの活用の可能性」『関西国際大学研究紀要』17、pp.101-108、

URL

https://kuins.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=480&item_no=1&page_id=13&block_id=17 (2017 年 12 月 13 日閲覧)

独立行政法人日本学生支援機構

URL http://www.Jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/index.html

(2018 年 5 月 2 日閲覧)

早瀬郁子・久家淳子・早瀬博範・穂屋下茂 (2015) 「ICT を活用した来日前日本語学習教材：一試行配信による検証—」『コンピュータ&エデュケーション第 38 号』 URL https://www.jstage.jst.go.jp/article/konpyutariyoukyouiku/38/0/38_74/_pdf/-char/ja (2017 年 8 月 3 日閲覧)

文部科学省「平成 28 年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」 URL http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1395145.htm (2018 年 5 月 10 日閲覧)

文部科学省「より効果的に授業を行うために学校の ICT 環境を整備しよう」 URL <http://jouhouka.mext.go.jp/school/pdf/2014ICT-panf.pdf> (2018 年 5 月 10 日閲覧)

JF 日本語教育スタンダード URL <http://jfstandard.jp/top/ja/render.do> (2018 年 4 月 30 日閲覧)

Nagisa Fukui & Satomi Kawaguchi (2015) 「ソーシャルネットワークキング Bebo を使った日本語学習環境のデザインと協働学習促進の試み」 *Electronic Journal of Foreign Language Teaching* , 12(1), pp.115-134. Retrieved

URL <http://e-flt.nus.edu.sg/v12n12015/kawaguchi.pdf> (2017 年 7 月 19 日閲覧)

FMV サポートビギナーガイド

URL

http://azby.fmworld.net/usage/beginners_guide/romaji/?supfrom=beginner_input (2018 年 1 月 6 日閲覧)